

# 國學院大學學術情報リポジトリ

New Types of the Compound Verb X-suru :  
yokubō suru, so suru, and kyara-ka suru : The  
Diversifying State of Japanese Language Research

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Nakamura, Yukihiro メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000414">https://doi.org/10.57529/00000414</a>

非動作性二字漢語／訓なし一字漢字／  
カタカナ外来語略語形＋接尾辞「化」

## サ変複合動詞の時代

— 連体修飾語としての「欲望する」「塑する」「キャラ化する」 —

中村幸弘

### 一、序章—書名に登場したサ変複合動詞

茂木健一郎『欲望する脳』（集英社新書・二〇〇七・十二）の「欲望する」が、いささか気になって、第二次大戦直前のあの「科学する」ほどではないにしても、取り立てて話題にする人もいようか、と思った。ただ、その後、『欲望する…』という書名を何点か見ることになって、抵抗するどころか、賛同して做うかの時代の感覚と趨勢とに気づかされた。多くの読者が歓迎しているかに見える、その「欲望する」は、確かに、現代人の心

理を適切に言い当てている。そうではあっても、その「欲望する」は、日本語のサ変複合動詞としては、原則を外れた語幹であるとして、一旦は躊躇しなければならぬはずの表現である。

当初、〈キャラ化させられた子どもたち〉ということだろうと思つて、その機会を逃がしてしまつていて、平成二十八年度センター試験国語の第1問の本文として読むことになったのが、土井隆義『キャラ化する／される子どもたち—排除社会における新たな人間像』（岩波ブックレット・二〇〇九・六）である。改めて、その書名を、〈キャラ化する子どもたち〉と〈キャラ化される子どもたち〉と読解して、『徒然草』の対偶中止法に

当て嵌めてみたりして、だから、(キャラ化させられた子どもたち)と感<sup>あ</sup>じとつていたのだろう、と反芻<sup>はんすう</sup>した。それにしても、この語幹は、カタカナ外来語の略語形に、さらに接尾辞「化」を付けたものであった。

昨・平成二十九年末、手にすることになったのが、佐藤卓『塑する思考』(新潮社・二〇一七・七)である。その「塑する」を理解するために、である。意識して検索したわけでもないのに、いつか、今週の本棚の養老孟司評(毎日新聞・二〇一七・八・二十)を拾い読みしていた。「塑」字に訓があったのだろうか。そう思つて久しぶりに漢和辞典を開いてもいた。古訓を引いてくれている角川『大辞源』(一九九二年)も、近世の「カタツチ」「スエモノヅクリ」に限られた。一字漢字サ変複合動詞は、和文にも早くから採用されて相応の変遷を重ねてきているが、いまや、二字漢語サ変複合動詞に<sup>お</sup>圧されてか、また、カタカナ外来語複合動詞に惹かれてか、新語に出会うことがなかったのか、そういう意味で新鮮だった。

以上の「欲望する」「塑する」「キャラ化する」は、この十年ほどの間に登場してきたサ変複合動詞である。それら三著は、いずれも、カスターマー・レビュー五つ星か四つ星半である。したがつて、その三著の各購読者は、それら各単語を、一往理解

語彙として受け入れていくことになる。現に、土井『キャラ化する』される子どもたち』は、高等学校卒業直前生徒が受験する国語科の問題文として採用されている。時、あたかも、高等学校新学習指導要領の国語科には、「論理国語」という科目も設けられることになった。そして、日々刊行されるエッセイふう評論・論説には、この種のサ変複合動詞が次々と生産されていて、広く読者に提供されている。いま、筆者は、せめて、この三単語が登場してきた背景なり事情なりをいささかなりとも解明したいと思うに至つた。それらサ変複合動詞が採用された文章が「論理国語」教材候補文章であるところから、国語科教材発掘研究とか国語科教材読解研究とかでもいうよりほかに、研究というにはあまりにも素朴な姿勢で、「多様化する日本語研究の現在」に参加させていただくこととする。

## 二、サ変複合動詞史素描―他動詞「す」「する」の、ヲ格対象語をヲ格非表出にして語幹として成立

自動詞「す」「する」は、『万葉集』歌の時代から、「梶<sup>かき</sup>の音<sup>ね</sup>すなり」(万・一一五二の一六)など、現代語としても「梶の音<sup>ね</sup>が、<sup>かき</sup>するようだ」となるようにガ格対象語に<sup>かき</sup>応ずるもので、

複合動詞になることなく、単独で用いられる。それに対して、他動詞「す」「する」は、ヲ格対象語を必須としていて、そのヲ格の格助詞「を」が表出されないうとき、そこにサ変複合動詞が成立する。その結果として、サ変複合動詞は、自動詞とも他動詞とも、また、自他両用動詞ともなった。

上代のヲ格対象語は、そのほとんどが動詞連用形で、連用形名詞と認識してよいものである。「釣<sup>つ</sup>する<sup>あま</sup>海女の」(万・⑨一七二五)／「嘆<sup>せ</sup>むかも」(万・⑫三二二三)などである。また、本来の名詞というか、非連用形名詞「足」「国」「妻」などに連用形名詞を添えた複合名詞「足ずり」「国別れ」「妻問ひ」をヲ格対象語とする「足ずり」□「つ」(万・⑨一七四〇)／「国別れ」□「て」(万・⑮三七四六)／「妻問ひ」□「けむ」(万・③四三一)なども見られた。

× × ×  
恐らくは、外国語としての古代中国語を朝鮮を経て受け入れた当代日本人は、その漢字の一字々々に訓を結びつけたのであろうが、漢熟語で動詞と判読できたものについては、音読して「す」を添えて受けいれてもいたのであろうか。いま、『万葉集』歌の題詞を「禍故<sup>くわこ</sup>重置<sup>じゆうぢゆう</sup>」□、「凶問<sup>きゆうもん</sup>累集<sup>らいじゆう</sup>す」。(万・⑤七九三)と読むときなど、そう思わせられる。『日本書紀』などにもそ

う読むところは多く、漢籍そのものについても、そうだったのであろう。そこで、中古の仮名物語の初めから、「対面<sup>たいめん</sup>」□「たまへ」(竹取・かぐや姫、帝の召しに応ぜず)や「行<sup>まじ</sup>幸<sup>あゆ</sup>」□「たまひけり」(伊勢・百十七・住吉行幸)／「親王<sup>みこ</sup>たちの逍遙<sup>たせう</sup>」□「たまふところにまうでて」(伊勢・百六・龍田川)などの、二字漢語を語幹とするサ変複合動詞の用例を見ることがになる。両物語には、さらに、「御覧<sup>みらん</sup>す」／「化粧<sup>けいざう</sup>す」□「懸想<sup>けんさう</sup>す」が見られ、仮名で「げぎやうす」となってあらわれる「現形<sup>げんぎやう</sup>す」が存在する。

一字漢字サ変複合動詞は、『竹取物語』以外にも、「案<sup>あん</sup>す」「要<sup>よう</sup>す」「具<sup>ぐ</sup>す」「請<sup>しやう</sup>ず」「奏<sup>そう</sup>す」「帶<sup>たい</sup>す」「打<sup>うち</sup>ず」の八異なり語を検出することができる。そのうちの「具<sup>ぐ</sup>す」については、延べ語数五語で、〈連れて行く〉意と〈添える〉意とに用いられている。『伊勢物語』には、「誦<sup>ず</sup>す」「念<sup>ねん</sup>す」が見られ、仮名で「ろうず」となって現れる「弄<sup>ろう</sup>ず」が存在する。「具<sup>ぐ</sup>す」は、『伊勢物語』にも用いられていて、〈携える〉意と読めよう。当代いかに便利な一単語であつたらうか。

× × ×  
中世は漢語の時代である。日本語史のどのテキストにも、そう書いてある。二字漢語サ変複合動詞も一字漢字サ変複合動詞

も、随所に見られる。「得長寿院を造進<sup>レ</sup>して」、「忠盛三十六にて昇殿<sup>ス</sup>。」(ともに、平家・①殿上閣討)、「雄劍<sup>ゆうけん</sup>を帯<sup>レ</sup>て公宴<sup>え</sup>に列<sup>レ</sup>」、「(同じく、平家・①殿上閣討)といった具合である。この漢語・漢字サ変複合動詞は、『太平記』のほうに、いっそう注目される用例を見よう。

× × × × ×

近代という時代を迎えて、二字漢語は、あの『哲学字彙』(明治十四年)に登載された用例を初めとして、この機会に多く新造された。そのうちの、動작성漢語名詞は、日ならずして、サ変複合動詞化していった。現代語の、例えば「影響する」「警戒する」などは、当代に始まる漢語サ変複合動詞である。哲学に必須の「抽象する」「演繹する」「帰納する」なども、当代以来の漢語サ変複合動詞である。そのような名詞がそのように「する」を付けて用いられることをどう整理しておくかに、早くも気づいた辞典があった。高橋五郎著『和漢<sup>和漢</sup>いろは辞典』(明治二一〜二二年)である。

そのように漢語名詞が動詞ともなる現象について辞典として明確にそれを表示したのは、三省堂(金田一京助監修)『明解国語辞典』(昭和二十七年)であった。その「あとがき」の8に、それに気づいた先輩格の辞典として、その高橋『いろは辞典』

を紹介してあった。したがって、それまでの国語辞典からは、その漢語名詞を動詞として用いてよいかどうかを知ることができなかった。『明解国語辞典』が広く愛好された理由の一つは、(名・自サ)(名・他サ)とする、そのサ変複合動詞としても用いられるという情報が容易に得られる点にあったか、とも思えてくるのである。

× × × × ×

明治になってからの西欧外来語は専門領域別の導入であったからか、名詞に限られるようで、カタカナ外来語サ変複合動詞の登場は、意外なほどに遅い。しかも、その表記も、現行のカタカナ表記ではなかった。外国語としてまず漢語に翻訳し、そのルビとしてカタカナ外来語を振る体裁であった。「神は創造<sup>シ</sup>する<sup>ル</sup>。人も創造<sup>シ</sup>する<sup>ル</sup>がよい。」(文章一口話・夏目漱石)などである。明治三十九(一九〇六)年の用例である。同年の用例に、「オーバーする」(東京日日新聞・スポーツ記事)が見られる。『日本国語大辞典第二版』のA行・カ行で、第二次大戦終了時までの用例は、上記の用例のほかには、「アタックする」(一九二一年)「エスケープする」(一九一九年)「オミットする」(一九一八年)「カールする」(一九三九年)「キヤッチする」(一九三九年)をしか見なかったのである。

どうして「エラーする」といってしまうのか。英語の error は、名詞だけである。ヲ格対象語として、まず、「エラーをする。」と言ったのであろう。「失策をする」を「失策する」にしたように、「エラーする」としてしまったのであろう。

いま、カタカナ外来語サ変複合動詞は、カタカナ外来語略語形サ変複合動詞の時代となってしまうている。「コラボレーション」を（現代美術の技法）としての協業と知って間もなく、いつか、広く協業すべてが「コラボ」と「コラボする」とになっていた。「コラボレーションする」が「コラボする」になったのか、「コラボ」を受けて「コラボする」になったのか、筆者には、その過程が認識できていない。

### 三、「欲望する」を意識した日から

「欲望する」を目にした瞬間、「欲望」は動作性名詞ではない、と感じた。国語辞典のいずれを見ても、「欲望」に「スル」などを添えたものはない。「欲望する」をサ変複合動詞として認定した国語辞典はどこにもなかった。「科学する」ほどではないにしても、「欲望」に「する」を伴わせるには、抵抗を覚えたいし、先人が等しく、そう感じてきていたのである。

その「科学する」については、『日本国語大辞典第二版』の「する」の語誌(3)の②に「昭和初期に「科学する心」という表現が問題にされたことがあるが、これは、「科学」を動作性のなものとして、「する」との複合を不適切とする論であった。」とある。その「科学する心」は、昭和十五（一九四〇）年、第二次近衛内閣の橋田邦彦文部大臣が用いたことで、物議を醸したもののようである。大東亜戦争といわれた第二次世界大戦に入る前年で、資源乏しい日本では、そういう発言の必要もあったのであろう。

「科学」は、（一定の対象を一定の目的と方法のもとに研究し、普遍的な法則を発見したり、構築したりする学問）といえよう。そこで、その「科学」を「研究」とか「発見」とかと思いついてしまつて、（研究する）とか（発見する）とかのつもりで、「科学する」と言ってしまった、とも解せよう。もちろん、何らかの意図があつてそう言つたのかもしれないが、しかし、やはり、「科学」という名詞に、動作性は感じられない。したがって、「する」という動詞を結びつけるには、抵抗を覚えるのである。

「欲望」は、（必要なものが最低限は整っているのに、それ以上になにかしたいとか欲しいとか強く望む気持ち）というようなことである。その語義を確認するために、念のため何点かの

国語辞典を開いたところ、多くの先人が「欲望」の語義を適切に解して「する」を結びつけることなく用いてきたのに、国語辞典の語釈には、「欲しいと思つて望むこと」などとするものが多かった。この「欲望」という名詞は、「欲し望むこと」をいう「欲」と「望」との字義どおりの二動詞連用の意味ではなく、「欲しいという気持ち」を意味する「欲」が望む気持ちをいう、と見なければならぬであろう。

さて、ここで、和語名詞で、本来の名詞というか、連用形名詞ではない、非連用形名詞がヲ格対象語となつていて、そのヲ格が表出されないで、サ変複合動詞となつて用例を、一瞥したくなつた。「心す」「影す」は、それで一単語の自動詞となつている。「……うたた寝に心して吹け秋の初風」(拾遺・③秋一三七)「すだきけん昔の人もなき宿にただ影する」は秋の夜の月(後拾遺・④秋(上)二五三)が、その用例で、「気をつける」(光が宿る)意である。「山葛す」「子の日す」「導す」も、それぞれ一単語で、他動詞である。「……山人とも見るが山かづらせよ」(古今・⑳神遊び一〇七六)「けふは君いかなる野辺に子の日して人のまつをば知らぬなるらん」(後拾遺・①春(上)二七)「を舟さしわたのはらからしるべせよ」(後拾遺・①①恋(一)六一六)がその用例で、「山葛を髪飾りにする」(子

の日の行事をする) (道案内をする) 意である。いずれにしても、非連用形名詞に付く「す」には、その具体的な動作の表現としては、無理の多いことが明らかである。

和語に対して、漢語は、その語義を字義に負うものが多い。「欲す」——「欲りす」の促音便形——「望む」も、そのように動詞であるところから、「欲求する」／「願望する」「希望する」「志望する」「熱望する」というサ変動詞化した用例ともなつている。「欲望」も、その語義がそのような字義どおりであつたとしたら、早くにサ変複合動詞化していただであらう。近世成立の「欲望」は、その「欲」が、あるいは、「欲」という名詞を意識して、「望」と結びついた語構成だったのでないか。そんなことまで考えさせられる日が続いた。とにかく、「欲望」は、サ変複合動詞化することなく、さきごろまで来ていたのである。今回、茂木は、「欲望」の語義を、(必要なものが最低限は備わっているのに、それ以上に何かしたいとか欲しいとか強く望む気持ち) から(必要なものが十分に備わつていても、なおいっそう何かしたいとか欲しいとか強く望むこと) ぐらいの意に切り換えて、サ変複合動詞化させたのである。う、と受けとめることにした。

茂木の、その『欲望する脳』に続いて、原田優輝『欲望する

インタビュー』（P・ヴァイン・二〇一五・十）に「欲望する」を見ることになった。さらに嶋浩一郎・松井剛『欲望する』とば「社会記号」とマーケティング』（集英社新書・二〇一七・十二）がその後を追って現れた。そこで、その著者（たち）は、女子力、加齢臭、草食男子、婚活、美魔女、おひとりさま、イクメン、インスタ映え、…という、どこからともなく現れて一般化した造語を「社会記号」と読んでいる。そういう、著者も、その書名に、どこからともなく現れて自らも使いたくなつたかもしれない「欲望する」を用いている、と、そんなふうには筆者は思わせていただくことにした。そのころ、その「欲望する」は、茂木『欲望する脳』が初出でないことを知ったからである。

それは、小岸昭『欲望する映像』ドイツ的なものと騎型児たちをめぐって』（駈々堂出版・一九八五・二）の「欲望する」であった。それだけではなかった。『アンチ・オイディプス』という、一九七二年に哲学者ジル・ドゥルーズと精神科医フェリタス・ガタリによって発表された著作があつて、そのなかで、人間の欲望を（欲望する機械）として捉えているようなのである。その翻訳には、市原宏祐訳『アンチ・オイディプス』（河出書房新社・一九八六・五）と宇野邦一訳『アンチオイディプス』（河出文庫・二〇〇六・十）とがある。その過程で、人間を（欲望

する機械）と見る見方が早くも浸透していたのであろうか。もはや、この「欲望する」については、複数の人たちが使用語彙としていたのである。そもそも、原語はどういう単語でどういう意味なのか、その一般的な訳語は何なのか、そういう領域の方のお教えをいただくほかない。

伝説的な話題となつて久しい「科学する」は、現在では、多様な領域の書籍や学習法などの名称に冠せられている。あの「科学する心」そのものが、教育財団の名称となつている。Wellsの辞書の類語辞典（シソーラス）には、「科学する」の同義語が紹介されている。科学する英語、科学する野球、科学する麻雀まで、対象は広く、研究し、発見し、発明しようとする取り組みはすべてそう呼ばれている。そのシソーラスには、「哲学する」の同義語も紹介されている。「数学する」を趣味としている人もいることを教えてくれる。

「欲望」と同じく、非動作性名詞といつてよい名詞に、「思想」がある。「思案する」「思考する」「思索する」／「回想する」「空想する」「幻想する」「構想する」「連想する」などがあるのに、である。（未完）



## 四、「塑する」を意識した日から

佐藤「塑する思考」は、その佐藤が佐藤卓であるところから、その認識が始まった。「明治おいしい牛乳」や「クールミントガム」の包装デザインで知られる佐藤卓の本が出た、と認識した。続いて、その佐藤が、もう十何年かになる、Eテレの子どものための日本語教育番組「にほんごであそぼ」の佐藤卓と結びついた。

後になって悔やまれたのは、『塑する思考』の書名を知っただけで、どのようなことを意味するか、もつと推測してみたらよかったのに、という後悔である。殊に、ブログで、その「塑」が「塑性」の「塑」であることを知ってしまったことが後悔された。いま、思い返すと、一瞬、(土人形をつくる思考)とは何か、失礼ながらネガティブな愚痴とか告白というか、そのように受けとめてもいたように内省される。その間に、角川『新字源改訂新版』(二〇一七・十)だけが、漢和辞典でただ一点、その熟語欄に「塑性」を載せていることを確認していた。

直ちに目次を見た。「はじめに」と「あとがき」を除くと、二十二編の見出しとページ、その二編めが「塑する思考」であっ

た。「はじめに」にも「あとがき」にも、「塑する」も「塑性」も出て来ない。その「塑する思考」を見ると、「柔よく剛を制す」というが、その「柔」には、「弾性」と「塑性」とがあり、人生における他者との向き合い方として、その「塑性」をもって向き合ってきた、というのである。それを「塑する」というサ変複合動詞で表現していたのである。柔軟な向き合い方の一つは、「弾力がある」であり、それに対するいま一つが「塑する」だ、というのである。

実は、ある時期、あの「キャラ化する」について考えていたので、その接尾辞「化」を借りて、「塑化する」でもよかったかな、と思った。ただ、一字漢字に付く「化」は、「強化」「硬化」「鈍化」など、形容詞性のものが多いところから、ちよつと躊躇した。「活性化」もあるから「塑性化する」はどうか、とも思った。しかし、直ちに、「惰性化する」「慢性化する」によって、それも打ち消された。そうではあっても、「塑する」だけでは、「塑像」が連想されるだけで、著者がいう「A案よりB案が好きで、C案はさらに好きだけれど、それよりD案のほうがもつと好きだから、」になかなか結びつかなかった。

十五編めの「分かる」と「分らない」と「分かりやすい」の末尾に至って、鈍感な筆者は、著者の「塑する」がようやく

見えてきた。そこには、「的確に状況を把握し、可塑的柔軟性で素直に対応する多様なスキルがデザイナーには求められているわけです。」とあった。試験問題の解答としてだったら、「塑する」は、「可塑的柔軟性で素直に対応する」意だったのである。

この著者は、動詞「する」について、「能動的に「する」を強く意識しているようである。第六編「デザイナーする。デザイナーしない。」において、デザイナーの語源であるラテン語の *designare* (デシグナーレ) から説き起<sup>こ</sup>して、英語の *design* (デザイナー) も名詞である前に動詞であったとして、「デザイナーする」という表現について、「デザイナーする」を「する」ことによつて、能動的に「する」ことばかりが強調されてしまう。」といている。その考えは「分かる」と「分からない」と「分かりやすい」の後半で、いま一度繰り返される。「デザイナー」は、既に〈デザイナーする〉であり、それに「する」を付けていう日本語に抵抗をお示しなのである。

自我主張の強すぎる日本の現代への批判である。自我は抑えても、個性は示せる。「ほどほどのデザイナー」「変なものを愛でる」「気を遣う」などの編の見出しにも、この著者の姿勢はうかがえる。この著者が、そこに用いることを躊躇する「する」は、昭和四十年代から平成の初めごろまでの高等学校国語科現代文

教材としての丸山真男「ことと「する」こと」の「する」のように見えてくる。丸山『日本の思想』(岩波書店・昭和三十六年)から採られた、その教材は、自由や権利は「獲得する」ものであり、「行使する」ものであり、「する」論理をもって行動しなければならぬ、とする文章であった。高校生までが参加した七十年安保闘争と重なる国語科教材である。

一字漢字サ変複合動詞と呼んできているが、「愛する」「信ずる」「和する」などが存在するところから、一字漢語かとも思えよう。「愛」「信」「和」は、一字漢語だからである。しかし、大方の用例と、その「愛す」「信ず」「和す」の成立を見ても、漢語ではなく、漢字に「す」が付いて成立したものと感じとつた遠い昔を思い出した。その一字漢字サ変複合動詞は、漢籍に始めて接した、当代の日本人がそう読みはじめた上古のある時期は別として、やはり、中世のある時期と明治の初年に積極的に造語されたように感じている。その明治初年、特に注目されるのは、久米邦武『米欧回覧実記』(博聞社・明治十(一八七七)年)である。『日本国語大辞典第二版』に立項される「運ずる」「嵌ずる」「協ずる」「較ずる」「査ずる」「製ずる」「輪ずる」「覧ずる」の出典で、その項の用例は、「輪ずる」を除いて、その『実記』が初出用例だった。「塑する」を契機に、

そんなことを楽しむことにもなり、その膨大な『実記』の復刻本（宗高書房・昭和五十年）を眺めることもできた。

この著者の動詞「する」に対して懐いている意識が、また、蘇ってきた。この著者は、動詞「する」に〈能動的にする〉意を意識している。「弾力がある」に対して「塑力がある」というように、「塑」字に〈塑的な行為〉の意を託し、著者の「する」を添えて、〈塑的な行為を能動的にする〉意の「塑する」を用いたのであろう、と思えてきた。いま、「塑する思考」を〈塑的な行為を能動的にする思考〉と思おうと思うことにした。そこで、「塑」字も、本来の字義〈粘土をこねて形をつくる〉から〈粘土をこねて自由な形をつくる〉へと転じて感じとれてきたようである。

(未完)

### 五、「キャラ化する」を意識した日から

「キャラ化する」についても、土井『キャラ化する／される子どもたち』に先行して、「キャラ化する」を連体修飾語とした書名が存在していたのである。相原博之『キャラ化するニッポン』（講談社新書・二〇〇七・九）である。しかも、そこから、平成二十二（二〇一〇）年度・北海道大学〈文・教育・法・経

済学部〉入学試験問題として採用されていたのである。その〈第五章「キャラ」の持つ社会的存在の意味〉のなかから三か所ほどが抜き出されて出題本文となっている。その「キャラ」と本来的なキャラクターとの違いや「いじられキャラ」「バカキャラ」など、多様なキャラが引かれて、そういうなかでのコミュニケーションのあり方が論じられている部分であった。したがって、「キャラ化する」についても、もはや、二著の著者がこれを使用語彙としていたことになる。殊に、この「キャラ化する」については、意識してこれを用いている、ということになるであろう。

それだけでなく、土井『キャラ化する／される子どもたち』の、その書名の理解を誤っていたのではないかと思えてきて、その結果として、「キャラ化する」は自動詞でもあり、他動詞でもある、と見なければならなくなってきた。この書名については、まず、「キャラ化(する) + される」と認識した。そのa「キャラ化」は、b「する」にもc「される」にもかかっている、という構造と読みとった。b (G + C) = G + aと展開して、「キャラ化する」<sup>d</sup>「キャラ化される」と理解した。そのうえで、「キャラ化する + キャラ化される」子どもたち<sup>e</sup>として、(D + e) f = Df + eD<sup>f</sup>というように、いま一度展開して、「キャラ化す

る子どもたち」「キャラ化される子どもたち」と読解していた。  
『徒然草』七段の「(か)げろふの夕べを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。」の解法を借りての読解であった。共通因子が前にあったり後に来たりであったりしたが、そこがまた、おもしろかった。

ただ、その「キャラ化する」について、書名だけを、しかも、目にした一瞬、大変な誤解をしていたことに、しばらくして気づいたことを告白しておかなければならない。それは、日本語の線状性という性質にも関係するのであるが、その「キャラ化する」を子どもたちを取り巻く学校の環境や周囲の大人たちとの人間関係がそうしているのであろうと感じとって、他動詞と誤ってしまっていたのである。しかし、それでは、「キャラ化する子どもたち」にはならなく、「キャラ化する大人たち」になってしまふ。その段階で、自動詞「キャラ化する」と思うことにした。ところが、次の「キャラ化される」の「キャラ化さ(↓キャラ化する)」は、他動詞でなければならぬ。そうでなければ、受身の助動詞「れる」を伴うことができないからである。そこで、上の「キャラ化する」は自動詞、下の「キャラ化さ(↓キャラ化する)」は他動詞ということになるな、と呟いて、一往納得することとした。そのうえで、出題本文を熟

読すると、その[15]段落に「自分をキャラ化して提示することは」とあって、その「キャラ化さ(↓キャラ化する)」は他動詞である。かねてから、接尾辞「:化する」に自動詞・他動詞の別を認めなければならぬと思っているが、とにかく、いま、そのように読み分けることができたのである。

この土井・センター出題文章には、「流動化する」「無意味化する」「単純化する」「透明化する」「複雑化する」と現れてきて、さらに「キャラ化する」「多元化する」と続くのである。その「多元化する」は、傍線D「価値観が多元化した相対性の時代には、誠実さの基準も変わっていかざるをえないのです。」が、問5として、その趣旨が問われる、その連体修飾語部分に含まれている。価値観に相対性が存在するということは、複数の偶数の価値観が存在するということで、それを「多元化する」といつている、と見てよいであろうか。この文脈あつての「多元化する」である。「一元化する」は、文脈がなくても概念が見えてくる。「多元化する」はどうであろうか、と感じたりもした。

さて、この「キャラ」が、カタカナ外来語「キャラクター」の略語形であることはいうまでもなく、その「キャラクター」が(コミュニケーションの場における振る舞い方の類型的な役

割)を意味することも改めていうまでもない。現代日本語の問題点の一つとして、カタカナ外来語略語形問題は、複合語化問題と関連するといわれた昔があった。テレビ放送といわれてテレビジョンは消え、歓迎コンパといわれてコンパニーは忽ち消えた。いま、キャラクターも内キャラ・外キャラといわれている。その略語形を二音節とするか三音節とするかなど、短縮化に傾向があるようである。「日本語学」(明治書院・昭和六十一年九月号)に菅野謙(当時、NHK放送文化調査研究所員)「洋語の略語形」なる論考が載っていた。その短縮傾向を分析、数値で示してくれてあった。現在までには、いっそう詳細な調査結果を報告する論考なども発表されていよう。テレビドラマ「ドクターX」の米倉涼子が、オペレーションを知らない子どもたちにまで「オペする」を教えてくれている。

『日本語大辞典第二版』は、「カク〔化〕」の〔二〕に〔接尾〕を立項してある。今回、自動詞・他動詞の別の必要を感じた。その語誌は、(1)・(2)とも充実した記事で、漢籍からの恩恵と幕末から明治・大正までの造語の動きを知ることができる。文化・教化・変化・造化は、項戴したものである。醇化・美化・悪化・緑化・強化・硬化・液化・気化は、国産である。そこに紹介される宇田川榕庵〔遠西医方名物考補遺〕(一八三四年)の「酸化」

だが、たまたま、小稿執筆中の平成三十年四月二十六日付朝日新聞「天声人語」に、その榕庵が「酸化」を編み出した話が載っていた。「キャラ化する」も、そういう歴史を背景にして、新しい語構成の誕生を見せたのであった。(未完)

## 六、文章の種類と語彙——「論理国語」の語彙としてのサ変複合動詞

平成三十年三月三十日付で、「高等学校学習指導要領の全部を改正する告示」が公示された。教科「国語」には、「論理国語」が登場し、教科「外国語」では現行の英語表現Ⅰ・英語表現Ⅱ・英語会話が、「論理・表現Ⅰ」「論理・表現Ⅱ」「論理・表現Ⅲ」となった。国語の新科目「論理国語」に対応するのは、新科目「文学国語」である。いわゆる論理的文章と情緒的文章とを意識して学習することになった、ということでもある。センター試験、それに先行した共通一次を加えて、四十余年、その第Ⅰ問に相当した文章が、「論理国語」の教材候補本文に相当することになる。

その論理的文章は、一般的なジャンル名をもっていえば、評論・論説ということになるが、その評論・論説の文体も、近代

から現代へと、相応に、その推移を見せてきている。ここでは、訓読文体を受け継ぎ、翻訳文体を受け入れ、抽象概念の二字漢語を導入して論理の展開を重ねてきているが、いつそう顕著な語彙の形態上の特徴は、二字漢語サ変複合動詞／一字漢字サ変複合動詞／漢語・漢字+接尾辞「化」サ変複合動詞／カタカナ外来語サ変複合動詞の使用頻度の高さにあった。直ちに感じられる評論・論説教材の手掛かりである。

旺文社『全国大学入試問題正解(国語)』で、ここ十年ほどのセンター試験の国語第1問を振り返ってみた。二〇一三年の小林秀雄『鏗』(一九六二年)は、素材からも発表年からも、現代の評論教材ではない。そもそも小林は、芸術論・古典論の評論家である。二字漢語サ変複合動詞は十二異なり語でしかなく、しかも、それは日常語だった。二〇〇九年の栗原彬『かんけりの政治学』(一九八八年)も、かんけりの描写が相当量を占めたところから、その二字漢語サ変複合動詞は、その後の、『鏗』を除いた出題文章に比して少なく、二十六異なり語であった。それに対して、二〇一七年の小林傳司(ただし)『科学コミュニケーション』(二〇〇二年)には、二字漢語サ変複合動詞が五十異なり語数えられた。延べ語数が数語に及ぶものも何語もあった。二〇一八年の有元典文・岡部大介『デ

ザインド・リアリティ集合的達成の心理学』には、二字漢語および二字漢語が関わるサ変複合動は三十一異なり語だったが、追って紹介するような、新形態の語幹を見ることになった。さらにカタカナ外来語サ変複合動詞が四異なり語で、そこにも以下に紹介するような諸用例が存在する。一方、各年度の第2問の情緒的文章をも覗いたとき、そちらには、和語動詞が多く、和語動詞連用の複合動詞も時に見られて、論理的文章でないことが、動詞からだけでも見えてくるのである。

その『デザインド・リアリティ』には、「意匠・考案・立案する」こと、とあって、数え方によつては、「意匠する」「考案する」「立案する」の三単語とも数えられる表現が見られた。続いて、「一日の時の流れを二四分制すること、ともあって、「二十四分制」とあってほしい語幹を四字熟語ふうに表示してあったのである。さらに、「批判されてきた／されている」とあって、「キャラする／される」を早くも模しているのか、と思えてきた。さらに、その文章には、「アフオーダンスの変化」についての図1:2が載っていて、その「アフオーダンス」というカタカナ外来語に(注)がない。「モノ自身から使用者に供される(アフオードされる)」とあって、そのカタカナ外来語サ変複合動詞「アフオードする」から「アフオーダンス」の意

味を読みとらせようとするのである。二段落飛んだ先の14段落に、その「アフォードする」がもう一度用いられてもいる。

とりあえず佐々木正人『アフォードダンス入門 知性はどこから生まれたか』（講談社学術文庫・二〇〇八年）『アフォードダンス—新しい認知の論理』（岩波科学ライブラリー・一九九四年）を手にして、キャン・アフォードに努めている。辛うじてジェームス・ギブソンに出会うことができたところである。

二〇一一年の鷺田清一『身ぶりの消失』（二〇〇六年）には、「再利用する」という、接頭辞「再」を冠した用例が見られた。二〇一四年の齋藤希史『漢文脈と近代日本』（二〇〇七年）にも、「再生産する」とあった。『デザインド・リアリティ』には、「再記述する」「再、人工物化する」「再、編成する」と続いた。土井『キャラ化する／される子どもたち』に接尾語「…化する」が頻用されていることは既に触れてきたが、二〇一〇年の岩井克人『資本主義と人間』（二〇〇〇年）にも、「実体化する」「商品化する」「定式化する」が見られた。その「商品化する」が含まれる部分が設問とされていることも注目しておきたい。二〇一二年の木村敏『境界としての自己』には、「この一人称代名詞で言表される存在に」、とあって、その「言表」に、〈原語によってなされた表現〉というように（注）が付けられて

いた。「言表される」として取り立てようとする案も、あったのではなかったか。小稿としては、「言表する」という二字漢語サ変複合動詞が存在した、ということになる。

かねてから、一字漢字サ変複合動詞については、連用格の連語格助詞とも呼びたい「に關して」「に際して」「に對して」「に反して」「を通じて」「を介して」などに注目しているが、その形式語性からか、近年、それらの漢字を仮名書きする傾向も見られる。二〇一五年の佐々木敦『未知との遭遇』（二〇〇一年）には、「にかんして」とあった。漢字の力は大きく漢字表記でのほうが深く理解できる、とあって、仮名書きに抵抗する読者もいよう。「に關する」「に際する」「に對する」「に反する」などは、連体格の連語格助詞と見てもよい。いずれ、仮名書きされる日も来ようか。

二字漢語サ変複合動詞には、自動詞となるもの、他動詞となるもの、自動詞・他動詞両用のものが存在する。この三十年、いや、四十年、この種、論理的文章には、その他動詞用例が受身の助動詞「れる」を伴って登場する頻度が高まってきている。主語が「人間〔が〕」の「管理社会のなかで疎外される。」など、被害の受身は理解できる。いま、苛立たせられるのは、無生物主語の「内政が干渉される。」「結論が危惧される。」「理論が

構築されよう。「資料が提供された。」「組織が破壊されている。」などである。「内政が干渉される」ならまだしも、「思索が干渉される。」となつて現れることもなくはないのである。かつては、これが日本語かといわれた非情の受身である。非情の受身については、三矢重松『高等日本文法』（明治書院・明治四十一年（大正十五年増訂））が「コロンブスに発見せられたる亜米利加」を用例の冒頭に掲げて非情の受身と呼んでいる。その後、自然主義の小説作品にも見られるとの報告があつたりした。「…松や梅の枯木の植はつた大きな鉢が、幾箇となく置おき駢びらべられてあつた。」（徳田秋声『あらくれ』）などである。いま、論理的文章に見る非情の受身は、入試問題として切り取られた三千字強程の一文章に十数用例も見られるのである。その背景には、二字漢語サ変複合他動詞の使用頻度の高さがあるかに思えてくるのである。

「A君の援助」といった場合、A君が誰かを援助するのか、誰かがA君を援助するのか、文脈なしでは理解できない。この問題も、二字漢語サ変複合他動詞の急増とともに発生した問題である。この問題を日々の学習において、どう認識させるのがよいかを、中学校教科書教材や国語辞典の用例の実態などを踏まえて整理を試み、学習法試案を提示したことがある。拙稿「連

体格「の」助詞」学習法試案」（此島正年博士  
土喜寿記念国語語彙法論叢）（櫻楓社・昭和六十三年）である。北原保雄「文法的に考える——日本語の表現と文法」（大修館書店・一九八四年）にいう「本居宣長の研究」である。「A君の援助」（A君を誰かが援助する）とも解せ」も「本居宣長の研究」（本居宣長を後世の誰かが研究する）とも解せ」も「援助する」「研究する」という二字漢語サ変他動複合動詞が存在しなかつたら、生まれなかつた表現である。

本章も、未完である。ただ、「論理国語」の教材本文に直接するサ変複合動詞の問題として、いま気づいたところは、ほほ以上である。それにしても、小稿の論題は、つい、契機となつた三著の書名に惹かれてしまった。いま、現状として注目しなければならぬサ変複合動詞は、小稿の論題として掲げた前段階の「二字漢語／一字漢字／漢字・漢語サ変複合動詞の時代」として止めておかなければならなかつたようである。上記に該当するサ変複合動詞の認識が、「論理国語」の読解に先立つて必要である、といつてよいであらう。

さて、ここで、因みに、二字漢語サ変複合動詞に該当する語数がどのくらいになるか、確認しておきたいと思う。半世紀を越えて改版を重ねてきていて穏やかさで定評のある旺文社「国語辞典第十一版」（二〇一三年版）からは、六九八四語検出さ



れた。うち、自動詞となるもの三一八五語、他動詞となるもの三三〇一語、自動詞・他動詞両用のもの五九八語だった。続いて、一字漢字サ変複合動詞も、同上辞典からは、三六七語検出された。いずれも、素朴な手作業の結果の認識である。見落としはあっても、下回ることはない数値である。

### 七、連体修飾語としての「欲望する」「塑する」「キャラ化する」

三著の書名の「欲望する」「塑する」「キャラ化する」は、いずれも、連体修飾語として用いられている点で共通する。

その「欲望する」に、ヲ格対象語は存在するのであるうか。意味上のガ格主語は、被修飾語の「脳〔ガ〕」であろうか。自動詞と判断されようか。非動作性二字漢語「欲望」に「する」が付いているところから、「欲望する」を〈欲望を感じる〉〈欲望を抱く〉ぐらいの意に読みとることにした。それを被修飾語「脳」に冠したとき、〈欲望を感じている脳〉〈欲望を抱いている〉というように、継続性がそこに発生してくることになるようである。

その「塑する」にも、ヲ格対象語が想定できない。ガ格主語

として想定されるのは、自称主語で、著者ということになる。したがって、自動詞と判断されよう。〈他者への向き合い方において、(粘土をこねて自由な形をつくるように) 塑的な行為を能動的にする〉が、その語義と見えてきたところで、この著作の二十二編から、そのようにして生きてきたということなるうと思えてきて、「思考」の連体修飾語としては、〈他者への向き合い方において、粘土をこねて自由な形をつくるように) 塑的な行為を能動的に進めてきた(わが思考)〉というように読むことにしている。

「キャラする」については、また揺れて、自動詞とも他動詞とも決めかねている、他動詞と見て、そのヲ格対象語は、「自分を」とすることもできたからである。続く「キャラ化される」は、受身の助動詞を伴っているので、その「キャラ化さ(↓キャラ化する)」は、他動詞でなければならぬ。「キャラ化する」の「キャラ」が〈コミュニケーションの場における〉振る舞い方の類型的な役割を意味するところから、「キャラ化する」の語釈を〈コミュニケーションの場において) 振る舞い方の類型的な役割を意識して演じる〉としてみた。それを「子どもたち」に冠すると、〈コミュニケーションの場において) 振る舞い方の類型を意識して演じている子どもたち〉ということに

なった。

「欲望する」も「キャラ化する」も、その連体形に、継続性を表す〈ている〉を添えて、いま、読んできた。「塑する」は、その著書の解説を借りて、〈他者への向き合い方において、粘土をこねて自由な形をつくるように〉塑的な行為を能動的に進めて、いる思考」と読むことになるようである。いや、〈ていく〉とも〈てきた〉ともなるようである。そこに発生する継続性や進行性等については、動詞一般についていえることなのであるうか。例えば村木新次郎『日本語動詞の諸相』（ひつじ書房・一九九一年）には、その第一部「動詞の形態論」の4「動詞の形態論的な諸形式の2・1・「連体用法」に「助詞をとともなわない場合」として、「野に咲く花はどこへいった。」「車の通る道は危険だ。」が引かれていた。〈咲いている〉〈通っている〉である。

この、サ変複合動詞の連体形を冠して漢語名詞で結ぶ書名は、この種の評論・論説には、一つの流行を見せているかに思えてきた。さきの旺文社『全国大学入試問題正解（国語）』で確認すると、なんと、茂木『欲望する脳』は、二〇〇九年高崎経済大学で出題されていたのであった。以下、山崎正和『社交する人間』（中公新書・二〇〇三年）——二〇〇七年神戸大学・

二〇一五年熊本県立大学——本田和子『変貌する子ども世界』（中公新書・一九九九年）——二〇〇七年佐賀大学／茂木健一郎『疾走する精神』（中公新書二〇〇九年）——二〇一〇年高知大学——安田登『神話する身体』（雑誌「言語」〈大修館〉連載論文・二〇〇八年）——二〇一一年京都大学——斎藤環『関係する女所有する男』（講談社現代新書・二〇〇九年）——二〇一三年山口大学——辺見庸『反逆する風景』（講談社文庫・一九九五年）——二〇一四年小樽商科大学——北垣徹『連動する認識』（雑誌「世界思想」〈世界思想者〉40号所収論文・二〇一三年）——二〇一四年一橋大学・山梨大学——鶴岡真弓『裝飾する魂』日本の文様芸術』（平凡社・一九九七年）である。準ずるものとして、内田樹『学びから逃走する子どもたち』（『下流思考』講談社）所収・二〇〇七年）——二〇一四年奈良教育大学——牧野智和『日常に侵入する自己啓発・生き方・手帳術・片づけ』（祥伝社新書・二〇一五年）——二〇一七年宮崎大学——が拾い出せた。そこで、思い出されてきたのが、山崎正和『演技する精神』（中公文庫一九八三年）である。《二字漢語サ変複合動詞を受ける二字漢語》という構成が、現代人の読書意欲を刺激するのであるろうか。